

どう交差させるべきなのか

源河・新川・山田報告への補足・コメント・質問

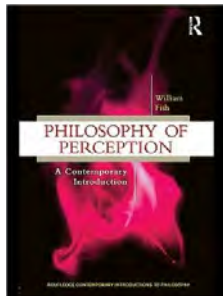
植村玄輝（日本学術振興会／立正大学）

uemura.genki@gmail.com

目的

- ・ 源河・新川・山田の報告を、現象学の伝統における対応する議論に引きつけながらまとめ直す。
- ・ その過程で生じる疑問を質問や問題提起というかたちで表明し、ディスカッションの叩き台を作る。

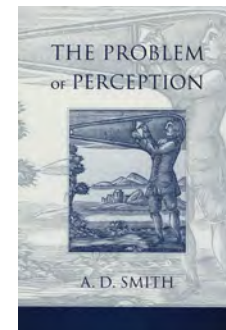
現象学と分析哲学の交差点？



William Fish, *Philosophy of Perception. A Contemporary Introduction*, Routledge, 2010.

翻訳：W・フィッシュ『知覚の哲学』、山田圭一監訳、國領・新川・源河訳、勁草書房、2014年。

現象学と分析哲学の交差点？



A. D. Smith, *The Problem of Perception*, Harvard University Press, 2002.

[書目] [The problem of perception](#)
AD Smith - 2005 - books.google.com
In a major Contribution to the theory of perception, AD Smith presents a truly original defense of direct realism the view that in perception we are directly aware of things in a physical world. It offers two arguments against direct realism-one concerning illusion, ...
引用元 273 関連記事 全4バージョン 引用

具体的に言って...

- A. 現象学は知覚の哲学にどう貢献するのか。
- B. 知覚の哲学は現象学にどう貢献するのか。
- C. 現象学と知覚の哲学が共有する今後の課題は何か。

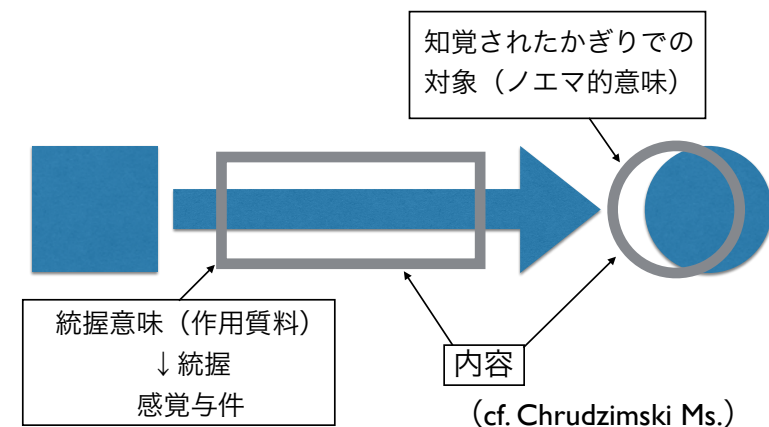
トピック

- 現象学と内容説／関係説論争
- 現象学者にしたがうと何が知覚されるのか
- 現象学者は知覚の現象的特徴を捉えたか

現象学と内容説／関係説論争

- フッサールの立場は関係説（／選言説）だ。
Cf. Overgaard 2013; A. D. Smith 2008.
- フッサールの立場は内容説だ。
Cf. Hopp 2011, ch.1; Føllesdal 1969.
- 分裂した評価の原因：世界への直接的な**関係**としての**志向性**という発想。

Husserl 1901, 1913



質問

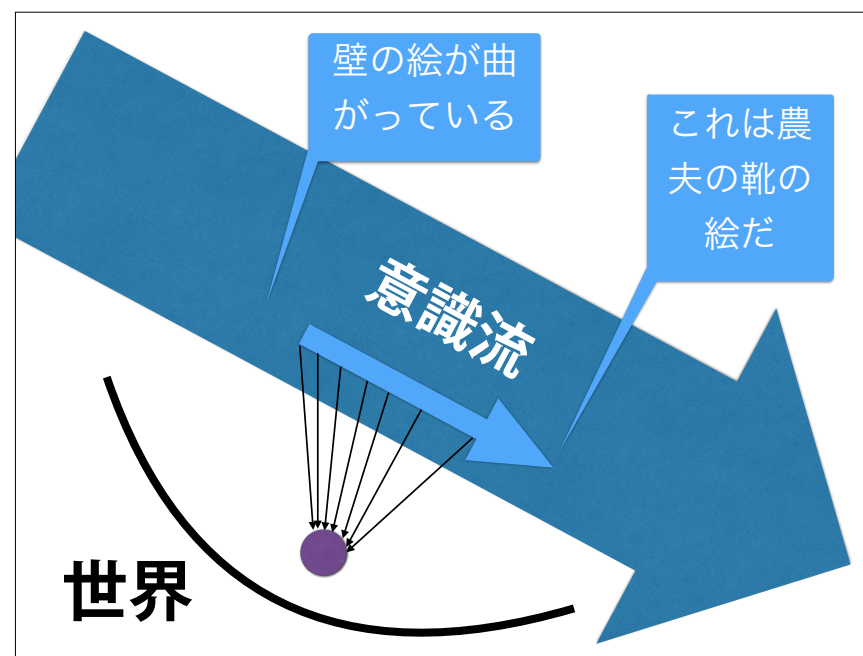
- ・ 「知覚経験」や「内容」ということで、それぞれどのような存在者のことを考えているのか。それらはどのように関係するのか。
- ・ 内容と感覚によって知覚の現象的特徴を説明するという（古典的な）モデルにはまだ可能性があるのではないか。
- ・ 現象学の伝統は知覚の形而上学に関して多くの洞察を含む考察を残してきたように見えるが、それに比肩するような試みは知覚の哲学にどれくらいあるのか。

伝統的現象学にしたがうと 何が知覚可能なのか

（物を取り巻く）世界：フッサール
全体としての対象（種性質?）：フッサール
物の背面：フッサール
プロセス（メロディ）：フッサール、マイノング
他人の心的状態：シェーラー、フッサール (?)
道具としての有用性 (?)：ハイデガー
価値 (?)：フッサール、ヒルデブランド
事態 (?)：フッサール

知覚への現象学的アプローチ

- ・ **全体論的な性格**
 - ・ 動的なプロセスとしての知覚経験
 - ・ 知覚経験とその他の経験の相互関係
- ・ 知覚概念の（不当な?）拡張



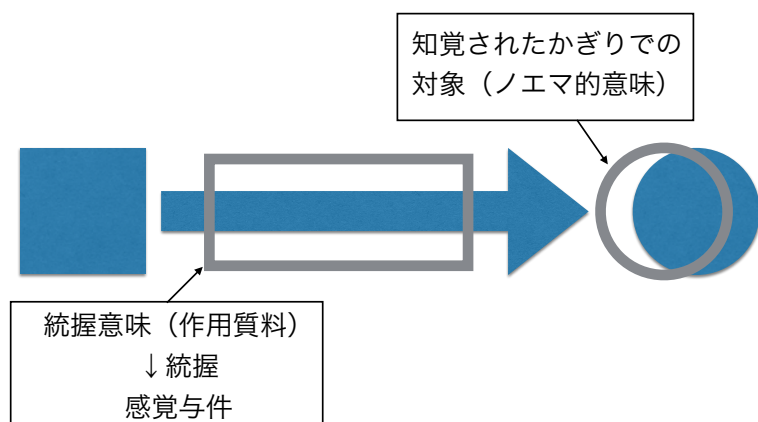
知覚の現象的特徴

- フッサールにおける候補：
 - 有体性 (Leibhaftigkeit)
 - 現前性 (Gegenwärtigkeit)
 - 自体所与性 (Selbstgegebenheit)
- 端的 (schlicht) であること

感性的知覚の端的さ

- 経験に豊かな構造を認める分析と裏表の関係にある
- 知覚作用は (述定作用のように) 複合的ではない。
- 知覚経験をそもそもどうやって個体化するのか。

現象学的分析の本性



問題提起

- 知覚経験の構造的特徴から知覚特有の現象的性格を導こうとするフッサールの考察は、phenomenal contrastや、脳に欠損のある患者の報告を用いる (cf. Nanay 2012) といった方法への対案としてどう評価できるか。
- 知覚の現象的性格をめぐる議論は、現象学の伝統における議論がそもそものようなものであったかを明らかにし、評価するために役立つのではないか。

- A. 知覚経験に豊かな構造的特徴を認めそれを分析するという現象学の伝統は、知覚の形而上学に確実に貢献する。
- B. 現象学が経験の現象的性格にどうアプローチしてきたのかについては、知覚の哲学やその周辺で現在蓄積されつつある議論が助けになる。
- C. 知覚経験そのものにどのような現象的特徴が属しているのかという問題は、現象学者と知覚の哲学者が共有する課題だろう。

参考文献

Chrudzimski, Arkadiusz Ms. "Intentional Objects and Mental Contents."

Føllesdal, Dagfinn. 1969. "Husserl's Notion of Noema." *The Journal of Philosophy* 66, 680–687.

Hopp, Walter. 2011. *Perception and Knowledge. A Phenomenological Account*. Cambridge University Press.

Nanay, Bence. 2012. "Perceptual Phenomenology." *Philosophical Perspectives* 26, 235–246.

Overgaard, Søren. 2013. "Motivating Disjunctivism." *Husserl Studies* 29, 51–63.

Smith, A. D. 2008. "Husserl and Externalism." *Synthese* 160, 313–333

ポイント（再掲）

- A. 知覚経験に豊かな構造的特徴を認めそれを分析するという現象学の伝統は、知覚の形而上学に確実に貢献する。
- B. 現象学が経験の現象的性格にどうアプローチしてきたのかについては、知覚の哲学やその周辺で現在蓄積されつつある議論が助けになる。
- C. 知覚経験そのものにどのような現象的特徴が属しているのかという問題は、現象学者と知覚の哲学者が共有する課題だろう。